

平成 22 年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣報告書

日立市立助川小学校 教諭 須藤 明美

1 派遣期日 平成 22 年 10 月 19 日（火）

2 研修先 学校名 埼玉大学教育学部附属小学校
所在地 埼玉県さいたま市浦和区常盤 6－9－4 4
<http://www.fusho.saitama-u.ac.jp>

3 研修内容

第 78 回 小学校教育研究協議会
研究主題 自己を磨く児童を育てる授業の創造（3 年次）
～新教育課程の全面実施に向けて～

(1) 第 1 時公開授業参観

第 6 学年 外国語活動 授業者 H R T 須藤 康親 先生
A L T David Plitnik 先生

研究テーマ 言語や文化について体験的に理解を深める指導の工夫

単元名 オリジナルの劇をつくろう

本時の展開（4 / 4 時）

- ① あいさつをする。（ H R T と → A L T と → 児童同士で ）
- ② チャンツをする。
- ③ 前時までに学んだ表現を発音する。
- ④ グループごとに発表の内容を確認する。
- ⑤ グループごとにオリジナルの「大きなかぶ」の劇を発表する。
- ⑥ 終わりのあいさつをする。

児童によく知られた物語である「大きなかぶ」をもとに、自分たちなりに工夫をしてオリジナルの劇をつくり、その発表を本時で行った。

既習表現をうまく使って、上手に、楽しい劇をつくり、堂々と演じていた。"Please help me." "What's the matter?" "Look at this." "Who are you?" "Let me in, too." "OK. Sure."と前時までに学んだ表現は多くはないが、十分にオリジナリティーのあるものに仕上がっており、感心した。

グループごとにテーマを決め、そのテーマに沿った形で登場人物を設定したことも、大変よかった。例えば、あるグループは、登場人物をオバマ大統領、カボチャ、オオカミ男、オバケ、魔女、黒猫とした。テーマは、「ハロウィン」である。また、あるグループは、テーマを「バランスのよい朝ご飯」とし、ご飯、みそ汁、サラダ、オムレツ、みかん、緑茶を登場人物とした。このような工夫によって、聞く側も、楽しみながら、集中し、真剣に聞くことができたのではないかなと思う。友だちの発表を聞き、そのよさに気づいたことで、児童の発表がよりよいものになっていったと感じた。また、お互いにアイデアを出し合いながらグループで活動したこととことから、苦手意識も改善され、結果として児童の意欲的な活動が促されたように感じた。

(2) 第 2 時公開授業参観

第 5 学年 外国語活動 授業者 H R T 岡田 大助 先生
A L T David Plitnik 先生

研究テーマ コミュニケーション能力を育成するための指導の工夫

単元名 外来語を知ろう

本時の展開（4 / 4 時）

- ① あいさつをする。（ H R T と → A L T と ）
- ② チャンツをする。
- ③ 自分の好きなフルーツを店で買い、オリジナル・フルーツ・パフェを作る。

- ④ 作ったものを紹介し合う。(ペアで → 全体で)
- ⑤ 終わりのあいさつをする。

店で300円分の果物を買うという場を設定し、一人1枚ずつ持ったマグネットボードの上に買った果物をおいて、オリジナルのフルーツパフェを作る。そして、自分の好きな果物をしめしながら出来上がったパフェを紹介し合う、という活動である。

果物屋の店員と客の2グループに分かれての活動では、積極的に英語を使ってコミュニケーションしようとする児童の姿が見られた。客は、300円以内でたくさん買い物をするために店員に値段を聞く必要があり、また店員も、それを伝える必要があったため、必要感をもってコミュニケーションができたためではないかと思われる。1店につき、店員役の児童を二人として10店つくったことや、1店で売る果物を2種類と限定し、店員役の児童の負担を軽減したことで、児童の活動がより活発になったと思う。

(3) 研究協議(外国語活動)

「外国の人々の生活や文化などに関心をもつとともに、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育成すること」をねらいとして、H16年度より総合的な学習の時間で扱う国際理解を進める具体的な学習活動の一環として英語活動に取り組んできた。

<外国語活動を行うにあたっての基本的な考え方>

- 「教える」から「学びを助ける」教師の姿勢の一層の重視
 - ・英語は覚えると言うより、使っているうちに身に付くという考え方で、学習を展開していく。
- 意志の伝達の重視
 - ・発音や文法の正確さのみを追求するのではなく、言葉によるコミュニケーションのみならず、ジェスチャーのような言語を用いない表現方法でも、自分の意志を伝えられるという体験を大切にしていく。
- 音声を中心とした外国語活動
 - ・児童の負担を増やし、英語嫌いに陥りやすい文字指導は避け、音声を中心に、聞くこと、話すことを通して音に慣れていく活動を重視していく。ただし、アルファベットなどの文字や単語は、音声によるコミュニケーションを補助するものであれば、取り扱うようにしていく。
- 多様な指導形態・体制の工夫
 - ・学級担任だけでなく、ALT、外国語に堪能な人などの協力を得るなど指導体制を充実していく。
- 外国語や外国の文化、国語や我が国の文化の理解
 - ・外国の言語や文化、我が国の言語や文化について興味や関心を喚起し、体験的な理解を図るように工夫していく。

<カリキュラム(年間指導計画)作成の基本的な考え方>

- 楽しく活動でき、体を使って表現する活動を通して、英語に慣れ親しむことを重視していく。
- 日常生活の中の話題、子どもにとって身近な話題を取り上げていく。
- 子どもが知りたい、表現したい、活動したいという欲求を把握し、積極的に取り入れていく。
- 繰り返し活動し、自然と身に付いていけるような学習の過程を工夫していく。
- 他の場面においても広く応用、転移ができる基礎的・基本的な表現を重視していく。
- 子どもの視聴覚に訴えるような教材・教具の活用を図っていく。
- 英語での会話を通して、ALTなどいろいろな人たちと触れる機会、関わる機会を設定していく。
- 児童の発達段階や教材の内容のバランスから文部科学省からでる英語ノートの活用を図っていく。

4 感想

積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するためには、児童が必要感をもって活動することができる場を設定していくことが大切である。実際の生活場面で生かしていくためにも、英語に慣れ親しみ、その楽しさを実感しながら、英語で表現したいと思わせるような授業を展開していくことが大切であると、改めて感じた。